



【今月の森人】(6頁参照)
飛田祐造さん 岡 慶一さん



お届けするペレットは 一〇〇%茨城産です。



ペレットストーブ『ソロー』の燃料となるペレットは、石岡市の自社工場で生産されています。原料の間伐材は、茨城の森から運び出されたものです。間伐材から生まれたペレットを燃料として使っていたことで、茨城の森はどんどん美しくなっています。

工場敷地内の集積場には、石岡市をはじめ、笠間市、小美玉市、つくば市、茨城町などから運び込まれたスギ、サワラ、ヒノキなどの間伐材や林地残材（山林に放置されている木材）が山積みされて、出荷を待っています。

①『ソロー』では、丸太を入荷前に放射能測定器で計測し、値が40ベクレル以下であることを確認したもののだけを購入して、ペレット製造工程へ回しています。

②念のために放射能が残留しやすいとされる樹皮を皮むき機でむいてから、破砕機に送り込みます（皮をむいてあるペレットはむいてないペレットよりも燃焼後の灰の量が少ないのも特長です）。

③破砕機で細かいチップ状にしたあとは、乾燥機で乾燥させます。

④乾燥したチップを粉砕機でおが粉状にしてペレット成型機にギュッと押し込んで熱圧縮すると、直径0・6センチ、長さ2センチの円柱形のペレットのでき上がりです。

1トンの丸太から約450キロのペレットができます。

茨城の体感ルームが営業を再開しました。

再開後は以下の営業時間に変更します。
午前10時～午後5時 定休日 毎週水曜日。
体感ルームは日曜・祝日も営業します。

ソロー水戸体感ルーム
茨城県水戸市元吉田町1477-11
【交通】
・水戸駅南口2番バス乗り場から
関東鉄道バス「吉沢車庫」行き
「一里塚下西」で下車徒歩1分。
・水戸駅南口からタクシーで約5分。



ソロー守谷体感ルーム
茨城県守谷市松ヶ丘 3-20-1
【交通】
・守谷駅中央西口から
関東鉄道バス「美園循環」
乗車「松ヶ丘3丁目」で下車徒歩2分。
・守谷駅西口からタクシーで約5分。



ペレットの購入は配達料無料で、
20袋(1袋10キロ)セットからお届けします。

茨城産ペレット
約40日分 200キロ(20袋)
12,960円(税込み・配達料無料)

0120-058-059
お問合せ・お申込み
カタログハウス・お客様センター
月～金は午前9時～午後7時
土曜は午前9時～午後6時(日曜祝日は休業)

カタログハウスの**ソロー茨城**
ペレット事業部

茨城県石岡市小見字新地前1048-1

インターネット [カタログハウス](#) [ソロー](#) [検索](#)

茨城県の山を守る 森林整備の実態。 県北山間地域では……。



伐り出された丸太は1カ所にまとめられ
県内の原木市場に運ばれる。

日本の国の森林の多くが人工林。

先人たちが1本1本植え、育ててきた山々は、
人の手によって守られてきました。

茨城県は全国でも人工林率の高い県です。

森林整備の担い手不足や木材価格の下落といった
厳しい状況のなかでも、たくましく、明るく、
茨城の山を守ってくれている人たちがいます。
その現場を訪ねました。

中嶋栄子（ライター）／千葉慶一（ソロー茨城）

日本は、世界的にも人工林率の高い国です。

日本の森林は、戦後にスギ・ヒノキを中心として積極
的に造林が進められた結果、人工林率が高くなっていま
す。平成24年の林野庁の統計によると、その数は全国平
均で41%。アメリカの8%、ロシアの2%に比べても、
国土環境の違いはあれど、段違いの数字です。茨城県も

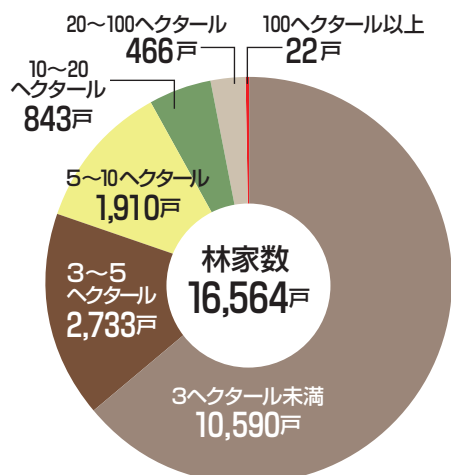
例外ではありません。むしろ、その値は全国平均よりも
かなり高く、人工林率は60%となっています。

森林が我々に与えてくれる恩恵は、木材や薪炭材など
資源だけではなく、水源かん養、二酸化炭素吸収などの
環境保全効果も重要な要素です。定期的な下草刈りや間
伐など、人の手で行われる森林整備をすることで、その
姿や機能は維持されていきます。ところが、ひとたびそ
のサイクルが崩れると、バランスはたちまち破壊されて
しまう可能性があります。人工林率が高いということは、
人の手がたくさん必要だということにはなりません。

1ヘクタール以上の森林を所有する林家は、茨城県で
は1万6千564戸。その80%が所有林5ヘクタール
未満の小規模林家です（2010年世界農林業センサ
ス）。個人で植林から伐採までを行うのは、かなりの
重労働。経費も甚大です。間伐をしたくても、1㎡当
たりの生産コストが1万233円と、主伐の生産コスト
の6千188円に対して1.6倍強になっています
（茨城県森林・林業振興計画平成24年改訂版）。

茨城県内の保有山林 面積別林家数

出典：2010 世界農林業センサス



民有林の森林整備の中心的な担い手は、森林組合。

では、茨城の森林を守ってくれているのは、どんな人たちなのでしょう？ 高齢化などで個人で山の手入れをするのが難しくなった林家のかわりに作業を請け負ってくれるのが、林業事業体です。組合や会社などの形態がありますが、林家の要望に合わせて、それぞれの得意分野で森林整備作業を行っています。

なかでも、各地域毎に組織されている森林組合は、民有林の森林整備の中核を担う存在です。森林組合法に基づき、組合員の出資によって組織されています。平成23年現在、全国で672組合（林野庁「森林組合統計」）。茨城県内でも、広域合併などを経て、平成27年現在で7組合があります。今回お邪魔したのは、組合員数2千933名、県内で最大規模を誇る大子町森林組合です。「組合員のための森林組合」をスローガンに、地域に根ざしたきめの細かい森林整備を行っています。地元出身の若手職員が多く、子どもの頃から慣れ親しんだ山や地域のために、活き活きと働いています。

これからの森林組合の役割。

後継者不在の山や林家の高齢化が進んだ山の作業は、自力で行うことが難しく、採算が合わないためにやむを得ず放置している状態の山林が増えています。山が荒れ

るに従い、自分の山の場所すらわからなくなっている林家が増えるなか、山を元の健康な状態に戻し、継続的に管理をして、林業を復興する大きな担い手が、森林組合なのです。森林組合が行うのは、季節ごとの山の手入れだけでなく、作業道の増設や森林経営の指導など、多岐にわたっています。

林業を取り巻く現状は、深刻な面があるのも事実。それでも、森に入ると、数十年前に植えられた樹々たちがしっかりと根をはり、堂々とした姿が我々を圧倒します。先人たちが営々と手入れを続けてきてくれた森の恵みは、収穫のときを迎えています。林業とは、やったことの答えが出るのは数十年後という、息の長い仕事。現在行っている作業が、山の現状と照らしあわせて適切かどうかの判断が、山の未来を決定します。いまのことは見る目と、先のことを見る目。大子町森林組合の組合長、佐藤信勝さんはこう言います。

「組合員が何に困っているか、何を望んでいるか。将来適正な、足腰の強い山林にするのはどうしたらいいかを、常に考えてやっています。そこで、5年前から始めたのが、境界整備です。明治時代に綱を張って定めた頃のまよになつて境界線不明の山に調査を入れて、杭を細かく打ち、空中写真と一致させた図面をつくって持ち主が誰か一目でわかるようにしました。自分の山の場所がはっきりすることで、森林所有者の意欲も向上しますよね。日本の人工林は、樹齢50年を迎えるものが多く、

間伐も済んでこれから手のかからない時期になるんです」

今こそ、広葉樹の活用を始めるべき。

大子町の周辺は、森林の40%が広葉樹林だと言います。広葉樹の活用をの必要性を佐藤さんは訴えます。

「広葉樹林で、椎茸の原木が不足しているという現実があります。広葉樹は燃料としても優秀だし、水源かん養にも大きな効果があります。これからは、針葉樹だけでなく、広葉樹の活用をメインに据えた施策を構築するべき。夢と希望がある道筋を、本来だったらこうありたい、今まで我々が何十年か努力してきた結論はこうありたいという、理論的な旗印は立てるべきです。

山の木が安くてどうしようもないと嘆いていてもしょうがない。持ち主がうなだれている間にも、山の木はすくすくと育っているんです。茨城の八溝山系の木などは、全国レベルでどこに出しても恥ずかしくない。林業の将来は明るいんです！」

山の底力に敬意を表し、山そのものと相談しながら、必要なことを過不足なく提供できる存在として、森林組合の果たす役割は、これから増々大きくなっていきます。



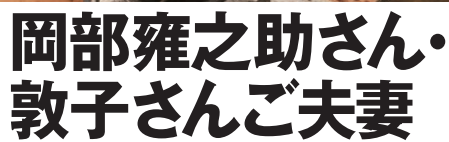
大子町森林組合の組合長・佐藤信勝さんに案内いただいたスギ林。入れの入った森林は、光がまんべんなく差し、康な空気が漂う。



内装も外装も木材がふんだんに使われた大子町森林組合の事務所。窓から大子の山々が見渡せ、最高の職場環境。林業事業体の多くが、木造建築の社屋だ。



「居間から寢室まで柔らかなぬくもりに包まれる。炎が見えると心が癒されるね」



ん「火を見ていると心が和み、落ち着きます」とよろこんでくださいます。

小さなお子さんも真剣なまなざしでじつと火を見ています。最近のお子さんは火をみる機会はめったにありませんから、きつといい経験になるのではと思います。

火をつけるのは開店1時間前の9時ごろから閉店の18時まで、使用レベルはいつも1で使っていました。店内は約20畳でよほど寒い日は2ぐらいまで上げたこともあります、ほとんどレベル1で十分でした。

実はカタログハウスから冊子が届くまで、ペレットストーブのことはまったく知らなかったんです。教えてもらって本当に感謝しています。



飛田 祐造さん

岡慶一さん

どんなに化学が発達しても、漆の右に出る塗料はありません。日本の重要文化財は、すべて漆が使われています。

木肌から浸出する漆を掻き取る。1シーズンで採れる量は、1本からわずか200cc 足らず。

ていたんです。ラッカー塗装というのは、漆の代用品としてイギリスで開発されたもので、その頃の親方に、漆と同じ仕上がりを出すように言われてたんです。でも漆なんて見たことなかったんでカルチャースクールに漆塗りを習いに行っていました。その後、家具屋は辞めたんですけど、漆塗りをまた再開した時に、漆って木から採れるんだって思い至ったんですよね。それで、ネットで調べた体験教室に参加したんです。そこで飛田さんと出会いました。8年前ですわね。いろいろ悩みましたが、漆掻き職人をやってみることにしました。山っていうのは、遊びに行くところで、住むところじゃなかったんですけどね(笑)。

——漆の木の植林も始めているそうですね。

飛田 岡さんが後継者で太子に残るというんで、7年前から植林しています。麗潤会というNPOと一緒に、40年間放置されていた休耕地を借りて、篠竹を伐って整備するところから始めました。3町歩の広さに、2100本くらい植えています。下草刈りや肥料やりなど、手入れが欠かせませんが、次の世代を育てるためにがんばっています。

——漆というのは、掻く人によつてまったく違うものになるとか。

岡 飛田さんの掻く漆は、きれいな山吹色になるんですよ。自分はまだまだ。どうしてもくすんじゃって。掻く時の手加減なんでしょうけど。

——漆器は、一般人には敷居の高いものであるのも事実。もっと身近になれば、需要も増えますね。

岡 そうですよ。漆器を一般のお客さんに知っていただく。地元の給食の食器として使うということも含めて、考えていかなきゃと思います。